連載 第69回

福聚山史

文 池浦泰憲

常圓寺にあった「日本最初の図」をめぐる歴史

○「日本初の図」はどこに

さて、さる浪曲師よりもちこまれた新聞の切り抜き記事から、「コンパスと烏口を使った日本初の圖」が常圓寺にあったことが知られることとなった。

先に紹介した新聞記事には、当時の住職（及川真能上人）の「この略圖が何百年の今日世に出たことは本當に喜しい事です」との言葉があるが、現在、常圓寺にはこの図はみあたらない。一体どうなってしまったのだろうか。

この図の行方について、菊香堂錦升師が書いた浪曲「感應胎籠祖師堂之由来」に次のような一節がある。

「…私も大切に保存して居りますが（私の保存して居りますのは昭和十一年七月十七日掲載の新聞切り抜き）、この略図は当時日本で有名な製図家秋田十七郎氏の作で天保十一年十一月の昔に書いた略図で、戦前迄常圓寺の客間に掛物になって居りましたが、戦災で焼失、残念なことを致しました。これはコンパスと烏口を使った日本では初めての図であります。」

つまり、この図は、当時常圓寺の客間に飾ってあったが、昭和二十年五月の空襲で本堂や客殿とともに焼失してしまったというのである。

○「雑司谷 長耀山感應寺 妙華院 境内三百二十五分之一 地圖」

それでは、この図について知る手掛かりはもうないのであろうか。

実は、昭和十八年に発刊された、江戸・東京の歴史に関する資料をまとめた『東京市史稿』（三十八巻）に、この図が所載されている。新聞記事に掲載された写真は小さく見づらかったが、この『東京史稿』に載せられた図は、記された文字もある程度確認することができる。まずこの図には「雑司谷 長耀山感應寺 妙華院 境内三百二十五分之一 地圖」と記されていることが確認できる。これがこの図の正式名称であったのだろう。

ところで、この図には「感應寺境内圖　東京常圓寺蔵　本圖　和算家長谷川善右衛門寛ノ高弟ニシテ銀座役人タル秋田十七郎義一ノ量地作圖ニカカリ、天保八年常圓寺ニ寄進セラル」との説明も付されている。

この説明は、この図の作成者が和算家長谷川寛の高弟、秋田十七郎であること、という点は紹介した新聞記事と一致するものの、その作成時期について、新聞記事が「一老人」の話に基づき、天保十一年に作成とするのに対し、天保八年とする『東京史稿』の説明と異なっていることがわかる。

○図に記された「由緒」

『東京史稿』にはこの他の説明や解説はないが、図には名称の他にも文章が書かれていることがみえる。おそらく先の説明は、これらの文章をもとにしているものと考えられるが、実物が焼失してしまったといわれている以上、ここに掲載されたこの図版を手掛かりに考えていくしかない。そこで今回、図版を拡大コピーし、解読を試みた。字の不鮮明な部分があり、よくわからないことも多いが、おそらくこの文章は、この図について、その由緒を記したものと思われる。そして、おおよそ読み取れる内容として、

①この図が長谷川寛の高弟「秋田義一」（＝十七郎）によって「天保丙申歳」に測量され、作成された「縮図」であること。

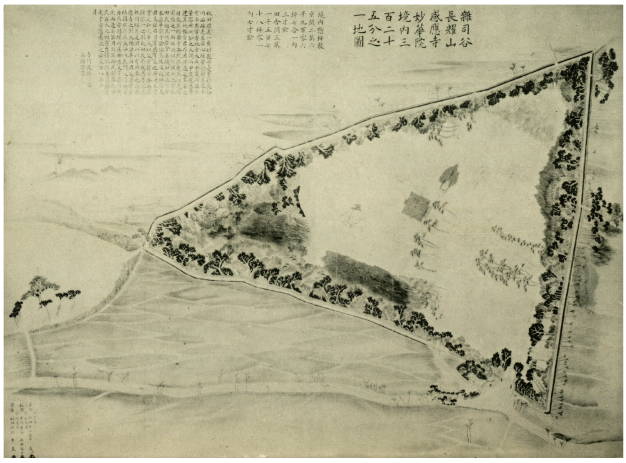
②この「縮図」は、秋田家の「祖先」の「冥福」を得る「一助」とするため寄進されたものであろうこと。

③秋田氏の祖は尾張国岩倉の織田氏であったこと。

④秋田氏は、もともと法華宗を信仰していた。

⑤それが、元和元年に浄土宗にも帰依するようになり、同家は両宗を信仰していたようであること。

などである。そして、この由緒書ともいえる文章の最後には「天保八年十一月」との年月が記されている。



『東京史稿』所載の「感應寺境内圖」

○図の作成時期について

①に示したように、この図は「天保丙申歳」に作成されたものであるという。「天保丙申歳」とは天保七年（一八三六）である。したがって、この由緒書にしたがえば、天保十一年という説明は間違いと考えるべきではないだろうか。

ところで、雑司ヶ谷の感應寺は、その創建が認められ、寺地が下賜されたのが天保六年、本堂をはじめとする伽藍が完成したのは天保七年であった。一方、秋田十七郎は、この時期、前号で触れたように「算法地方大成」という、年貢計算や検地・普請の実施に必要な算術や測量の技術について書いた書物の製作にかかわり、天保八年に発刊している。

この由緒書にもその書名がみえ、この図はこの書で解説されているような測量技術などを駆使して作成されたと説明されているようである。つまりこの図は、十七郎が手掛けた仕事、業績と深い関係があるといえるだろう。

○この図の意義

また、由緒書で注目されるのは、秋田氏の出自とその寄進の意義についてである。秋田氏は尾張国を出自とし、法華宗と縁があったという。十七郎は、縁のある法華宗の寺院の境内図を作成し、そして法華宗の寺院に先祖の冥福を祈るため寄進したのである。

この図が現存しないことは大変残念である。しかし、残された記録から読み取ってみた結果みえてきた、十七郎にとって誇るべき仕事の成果ともいえるこの図が先祖への供養として寄進されたという史実は、この図が「日本最初の圖」という価値の一方で、それとはまた別の価値をもっていたことを伝えるものと考える。